

研究部だより

秋田県立栗田支援学校
研究部 第3号
令和7年10月24日発行

今回の研究部だよりでは、9月に行われた各学部、学科の授業研究会について紹介します。今年度の研究テーマである『児童生徒が生き生きと学ぶ姿を目指した授業づくり』の実現に向け、有効だった支援や手立てについて、児童生徒の姿（発言や行動）を捉えて協議しました。協議内容を整理したことで、成果と同時に、次時へつながる有効な手立てを検討することができました。各学部、学科の取組や指導助言を参考にして、今後の授業づくりに生かしていきたいところです。

9月22日(月)	中学部2年 生活単元学習 進路Aグループ「しごと体験 〜もっと知ろう!しごと、じぶん〜」
単元について	中学部には、学級や学年のテーマに沿って取り組む生活単元学習の他に、実態別の学習グループで進路学習に取り組む生活単元学習がある。 本単元では、中学部2年生の進路Aグループが様々な仕事を実際に体験し、それぞれの仕事で大切なことを考える学習を通して、仕事や働くことに関心をもったり、自分にもできたという経験を重ねて自信をもったりすることをねらいとしている。
本時のねらい	車椅子介助の仕事で、利用者に安心して乗ってもらうためにどうしたらよいか考えながら実践したり、気付いたことやできたことを発表したりする。

グループ協議での意見

考えながら実践できる活動設定



- ・介助者役と利用者役を交代して、繰り返し実践できる設定がよかった。利用者の視点での気付きも見られた。

感じたこと、気付いたことの表出



- ・「〇〇したほうがいいと思う」など積極的に発言していた。
- ・教師と生徒のやりとりが多かった。

気付きを深める振り返り



- ・なぜこれが大切なのかという視点で振り返ると、相手の立場に立って仕事を考える姿勢の育成につながると思う。

次時に向けた手立ての工夫

- ・「相手がいる」「誰かのためにやっている」ということを、経験を通して学べるように、目隠しをして利用者の体験をしてみてはどうか。また、相手意識をもつことはどんな職業においても大切な視点なので、他の仕事を体験する際にも相手の立場に立って考えていく姿勢を養っていきたい。
- ・生徒と教師の間で言葉のイメージを共有できる手立てがあるとよい。(板書やイラストの提示など)

指導助言(齊藤 理香 教頭先生)

- ・生徒の気持ちや発言を細かく丁寧に拾って授業を進め、振り返りにつなげていた。
- ・生徒に考えさせる活動では、何をどこまで考えさせたいかというねらいを、教師が具体的にもっておくことが大切で、そこを起点にして生徒が考えるために必要な材料を用意することができる。
- ・生活単元学習として行う進路学習なので、ねらいを考える難しさがあると思うが、中学部段階で学んでほしいのは働くことの土台となる気持ち(勤労観)。身近な人だけでなく、他学部や管理職、知らない第三者など多様な人から必要とされる経験を積んで、有用感を感じたり自信をもったりしてほしい。

9月 24日(水)	高等部普通科1年 職業科 進路Cグループ 「卒業後の生活について知ろう」
単元について	職業科のオリエンテーションで特に学びたいこととして、「卒業後の生活について知りたい」「いろいろな生活の場を知りたい」「グループホームを見学してみたい」という意見が生徒からあがり、卒業後の生活についての関心が高かった。 本単元では、卒業後の生活を職業編、生活編に分けて、様々な就労の場や生活の場があることを知り、実際に見たり聞いたりする活動を通して、卒業後のイメージを広げ、自分の将来について具体的に考える機会として設定した。具体的な自分の将来像を思い描くことで、学校での学びの意義をより実感することにつながり、自己実現に向けて努力しようとする思いが育まれるのではないかと考えた。 高等部1年生の前期の段階では、漠然とでもよいので卒業後の自分の生活をイメージし、段階的に具体的な勤労観やよりよい生き方について考えられる姿を目指したい。
本時のねらい	①見学して分かったことを伝えたり、聞いたりして、グループホームで必要な力が分かる。 ②実家暮らし、一人暮らし、グループホームでの暮らしの違いや特徴を考える。

グループ協議での意見

生徒の願いや思いをもとにした
学習活動の設定

生徒一人一人が自ら活動したり、
考えたりすることができる状況づくり



自然な協働性を生むテーマ設定、
学習集団の工夫



ワンステップシートや聞き取り
→生徒が学びたいことの授業化

動画での振り返り
→授業の出欠に関わらず、イメージしやすい環境

グループ編成の工夫
→生徒が話しやすい雰囲気
→話し合う、プリントを見合う機会

次時に向けた手立ての工夫

- ・動画を見る視点や話し合いの観点、ルールをあらかじめ提示する。
- ・めあてとまとめの整合性がとられているか検討する。
- ・生徒個々の学び、生徒が自分事として考えられているか。(個→グループ、全体→個)
- ・T2以降の教師がいる授業だったら、どのような支援や手立てをしていたか。

指導助言(田中 紀和 副校長)

- ・将来について具体的に思い描くのは非常に難しく、高等部3年の卒業の場面までずっと考えなければならぬことであるため、学習のタイミングをよく考えなければならない。
- ・将来について、生徒たちなりにイメージしようとしていたので、生徒同士で話し合う時間を増やしてもよいのではないかな。
- ・「実家暮らし」について、職場に通うという未経験の生活状況を生徒が正しくイメージできているだろうか。現在の生活状況と結び付ける機会を増やすことで、将来と結び付けることができる。
- ・校内実習の振り返り(作業面、態度面、生活面)を経て、報告会では日々頑張ることを発表できていた。
→目標がたくさんあることもよいが、生徒自身が頑張ることが分かっているか、取組状況を本人や教師が把握できているかについて、確認できるようにしておく必要がある。
- ・生徒が何を決定して、何を日々頑張るのかをよく考えていきたい。
- ・社会での役割を果たす、確かな職業観の育成を目指してほしい。

9月 26日(金)	小学部2年 遊びの指導 「わくわくすいぞくかん」
題材について	本学年の児童は、自ら教師や友達と関わる児童、教師の働き掛けを受け入れて関わりを楽しむ児童と実態は様々であるが、どの児童も友達に関心をもっている。また、これまでの遊びの経験の積み重ねにより、好きな遊び場を自ら選んで向かったり、遊具を介して友達と関わりながら遊んだりする姿が見られるようになってきた。 本題材では、校外学習で行った水族館をテーマに遊びを展開する。動物園への校外学習の経験を生かした前題材「わくわくどうぶつえん」で経験した遊びや、ダイナミックに体を動かす遊びを取り入れることで、初めてのことが苦手な児童も安心して遊べるようにする。遊びに用いる遊具を児童が制作することで、遊びへの期待感を高めるとともに、自分で考えて選択・実行する主体的な姿を引き出したい。また、遊びの展開の中に、友達と二人以上で遊ぶコーナーや、みんなでミッションに挑戦する活動を設定することで、友達と関わる姿を期待できると考え、本題材を設定した。
本時のねらい	①自分の好きなコーナーを選んだり、教師の誘いを受けたりして、時間いっぱい遊ぶ。 ②教師や友達と一緒に、ミッションをクリアしたり、悪者をやっつけたりする。

グループ協議での意見

児童の興味・関心に応じた遊具、活動



- ・どの児童も好きなコーナーを選んで時間いっぱい遊んでいた。
- ・教師も衣装を着たり、遊びの助言をしたりする博士になったりと、雰囲気盛り上げていた。

友達との自然な関わりが生まれる遊びの設定



- ・複数人で乗れる乗り物や、一緒に魚を釣り上げるなど、自然に友達と関われる遊びがあった。
- ・友達と協力して行う「ミッション」のため、児童が友達を誘う姿があった。

達成感を味わえる工夫



- ・「ミッション」をクリアしてシールをゲットしたことが嬉しくて教師に見せに来る児童がいた。
- ・活動の終盤、全員でワニを倒すミッションにより、一体感が生まれていた。

次時に向けた手立ての工夫

- ・友達と自然と関われるように設定されている。これを継続し、繰り返し友達と一緒に遊ぶ経験を積み重ねたい。遊びの指導だけでなく、様々な場面で行えるようにしたい。
- ・自分で遊びを工夫したり広げたりした児童に気づき、教師が言葉を掛けられるとよい。また、児童が考えるような場面を設定できるとよい。
- ・遊具を精選・整理できるとよい。児童が必然的に関わる場面が増え、また教師の目が届きやすくなる。

指導助言(大川 康博 教頭先生)

- ・体育館いっぱい多くの遊具が準備されており、またその素材や仕掛けに児童の興味・関心に応じた様々な工夫がされていた。たくさんの工夫があるのだから、教師が働き掛けを控え「見守る」「待つ」時間も必要だったのではないかな。
- ・児童はとても楽しそうで、満足感でいっぱいだったと思う。だが満足感と達成感は同じか。達成感を得るためには、「できた」という児童の実感が必要。教師が目標を達成した児童の姿を具体的にイメージすることで、評価規準が明確になり、児童が達成感を味わえるような言葉掛けや称賛といった学びの価値付けができる。
- ・児童が楽しいと感じる遊び、遊び方とはどのようなものか、学年の教師全員で今一度考えてみてほしい。教師の「きっと楽しい」という思い込みを児童に押し付けることのないように、教師の主観ではなく、客観性を高めて授業づくりを進めてほしい。

9月29日(月)	高等部総合サービス科1～3年 道徳「相互理解・寛容 ～みんなちがって、みんないい～」
題材について	本学科では全員が一般就労を目指している。将来の自立と社会参加を目指す生徒にとって、他者とよりよい関係を築いていくことは重要な力であると考え。学校卒業後を見据え、物事を多角的な視点で考え、他者と円滑な人間関係を構築していく力が求められる。 本題材では、道徳科の内容項目「相互理解・寛容」を取り上げ、多様な価値観や考え方があることを知り、互いに尊重し合う気持ちを育むことを目指している。様々なテーマや事例などを基に、登場人物の心情や背景などを推察したり意見交流したりすることを通して、物事を多面的・多角的に捉える思考を醸成していくことを目指したい。
本時のねらい	様々な角度から物事を考える大切さに気づき、広い視野をもって生活していこうとする態度を養う。

グループ協議での意見

学びを深める発問の工夫



- ・「なぜ?」「どうして?」と生徒の思いを引き出すやりとりが効果的だった。
- ・教師が生徒の発言を肯定的に捉え返し、話しやすい雰囲気だった。

生徒からの様々な表出



- ・友達とのやりとりを通して自らの考えを変える生徒がいた。
- ・頷きや相づちなど、言葉以外で表出する姿が見られた。

振り返りの工夫



- ・ワークシートと振り返りシートを分けたことで、生徒の変化が視覚化された。
- ・意見を共有する時間を設けたことで、考え方の違いに気付く生徒がいた。

次時に向けた手立ての工夫

- ・登場人物の内面に迫る発問はとても難しいと感じた。生徒の気持ちを掘り下げる問いをさらに工夫できるとよい。
- ・教材の提示の仕方が大切だと感じた。事例場面をイメージできるようにイラストを設けたが、イラスト提示の仕方や場面の切り取り方によって生徒がもつイメージが変わるため、留意していきたい。
- ・題材を通して記入している「振り返りシート」が生徒の本音を引き出す手立てとして有効だった。今後も本時のワークシートと題材を通しての振り返りシートを用意するなど、様式や提示の仕方を工夫できるとよい。

指導助言（秋田県総合教育センター主任指導主事 伊藤文子 氏 同センター指導主事 菅原徳浩 氏）

- ・小グループでのディベート形式は生徒の意見を引き出すよい機会となり、有効であった。
- ・安心感のある中で授業が展開されており、生徒たちが発言しやすい雰囲気づくりがなされていた。
- ・言葉での表出が少ない生徒の考えや思いをどのように授業の中で引き出すか工夫していく必要がある。
- ・単発的な意見交換とならないよう、生徒たちには自らの経験と関連させて思考できるような手立てが必要となる。
- ・意見交換をする際に気を付ける三つのポイントとして、①テーマを狭めすぎない、②生徒の経験を引き出す発問、③生徒の心を揺さぶる切り返しが必要となる。特に②③では、生徒が自らの考えを見つめ直すことができるように「本当にできるかな?」「同じような経験があった?」などの問いをしてみてもいい。小中学校では「物分りの悪い教師を演じる」などの例えがされているが、そのような視点で生徒とのやりとりを進めてほしい。